



「歯科医師として」

石巻市 三宅歯科医院 三宅 宏之

3月11日14時46分、医院には4名の患者さんがいた、足の踏み場もないほど散乱した医院から患者さんを外に避難させる、パーキンソン病で歩行困難な患者さん、腰を抜かして立てない患者さんをスタッフと抱えて階段を下りる、走り周ってタクシーを探し患者さんを乗せてお返した。

近所から来院している老夫婦宅、半身不随の息子と高齢の母親二人暮らしの家を訪ねる、家の中は散乱しているが無事であった、津波警報が出ているので避難するように伝えた。

次にスタッフの安全を考える、地震で落下した隣の瓦でスタッフの車1台が走行不能、1名の自宅は渡波地区にある、医院から見える湊小学校付近はすでに黒い大量の煙が高く登っていた、スタッフ4名と避難所指定の石巻小学校を目指す、道路はすでに渋滞していたので車は置いて歩いて向かう。

津波警報が流れる中、石巻小学校に到着、津波が来るのであればもっと上を目指そうと話し、石巻市立女子高を目指す、市女に到着するが人があふれていて中に入れない、私もスタッフも半そでの白衣で、雪がまっけていて寒いので近くの私の自宅を目指す、自宅から見える南浜町を見て絶句した、その時初めて市女が人であふれている理由を理解した。

門脇小学校に通う長女、次女、日和幼稚園に通う三女、妻の姿が家にはない、門脇小学校に向かうも入れない、途中ずぶ濡れの人と何人もすれ違う、とにかく家で待とう、30分ほどして全員が家に帰ってきた、地震発生後門脇小学校では教員の引率で児童全員は日和山神社に向かった、1年生は学校が終わりすでに帰宅してしまっていた。

家族全員5名、スタッフ4名、スタッフの友人2名、スタッフの兄、私の父と総勢13名で4日間私の自宅で生活した、スタッフを1名ずつ家族のもとへ送りとどける、患者さん、スタッフと無事に帰し医院長としての責任は果たしたとほっとしたのを覚えて

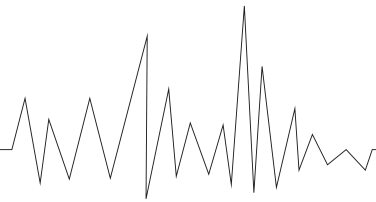
いる。

その後やっと母親、妹家族、弟家族の搜索を始めた、弟の妻、姪二人の安否は判らなかった、鹿妻方面や矢本方面を自転車で探しまわったが会う事ができなかった、鹿妻小学校の先生から津波の後に会ったと聞き、無事を確認した。

次に歯科医師として何をすべきか考えた、市女、石高、石中、門中と避難所を回って代表者に話を聞いたが歯科の需要はなさそうだ、食べる物も毛布もなく歯科どころではない。また市女には須田先生がいらっしゃったので状況を聞いてみたが、入れ歯安定剤が欲しいと言われ、試供品の安定剤とレジン届けた、須田先生は避難しているご高齢の方々、けがをした方々にずっと付き添っていたようだ、「朝起きると呼吸をしていない方がいる、また家にいた妻はダメだろう」とお聞きした。須田先生の長男と私は同級生で小さいころ奥さまにはよくお世話になった、奥さまの優しい笑顔を思い出した、奥さまが亡くなり家も無くなったのに献身的にけが人のお世話をする須田先生をみて、私も歯科医師として何かするべきことがあるはずだと思った。

警察歯科医の講習会を2年前に受講していたことを思い出した、身元確認班班長の江澤先生からも、石巻で何かあった時は頼むと言われていた。スタッ





フを全員返した15日夕方に遺体安置所となっていた総合体育館に向かった、すでに鈴木裕先生がいらっしゃった、ずらりとフロア一面に並ぶご遺体とすがりつくご遺族を見てなんとかしなければと思った。警察から「明日はまだ手つかずの牡鹿に行してほしい、道のりは何時間かかるか分からない」と言われる、鈴木先生に総合体育館をお願いし私が牡鹿へ行くことにした。

16日朝8時、石巻警察所集合、警察車両2台で牡鹿へ向かった、途中の浜の集落が全滅しているのを見て力が抜けた、3時間かかって牡鹿に到着する、ひどい状況である、生存者はいるのか？今日は何体検視しなければいけないのだろうと不安になった、がれきに埋もれた牡鹿体育館の中が遺体安置所になっていた。

身元不明のご遺体が少ない、小さい町なので人相、着衣で殆ど個人を識別できたらしい、雪がしんと降り続く中、体育館でひたすら口腔チャートを記入した、体育館のガラスはすべて割れていて風が冷たく手が悴んでチャートがうまく書けなかった、講習会では3人1組で口腔内を見る人、チャートを記入する人、明りを照らす人での実習だったが、ここではすべて一人で行うしかなかった、すでに死後硬直がひどく金属性のヘラを無理やり入れ口をこじ開けた、一人で見てチャートを記入するとなると何度もこじ開けなければならない、検視が終わり石巻警察所に着いたのは20時を過ぎて真っ暗だった、腕が筋肉痛になっていた。

17日に総合体育館のご遺体は300体を超えてフロアが一杯になり、18日から旧青果市場が遺体安置所になった。

17日から24日まで毎日、旧青果市場に通った、総合体育館から考えると10日間毎日である、このころ津波に流された方が楽だったかもしれないと考えていた、うつ状態だったと思う、25日に休みをもらって26日から28日まで、4月は古藤野寿広先生、佐々木一久先生、西村秀一先生、阿部清一郎先生、齋藤嘉弘先生、桑島修悦先生、泉谷信博先生が来てくれて交代制になったので3日、6日、7日、8日、9日、13日、16日、17日、18日と検視に出た。

3月17日に検視に来て頂いた大崎支部の川村洋先生から古川は被害が少ないので、石巻支部の為になんでもするとの申し出があったので避難所を見てほしいとお願いした、20日に川村洋先生と大崎支部副会長の戸田慎治先生（現会長）が避難所の現状を見たいと連絡があったので、検視の合間に市女、石高、石中、門中と市役所を回った、市役所の健康管理課で対応してくれた課長から「兵庫県などから数名の歯科医がきているが、どこに行っていたかいいのかわからない、歯科医師会と連絡が取れなくて困っている、避難所や市民から問い合わせがあると診療してそうな医院を紹介しているが治療していただいているのかわからない」との話だった、避難所に仮設診療所を設置するとお話し了解を得た。

その後何度か市役所からボランティアの歯科医師がきているがどこに行っていたかいいかと連絡があり、石中、門中に行っていた。

21日に門中4階に仮設診療所を作った、私は2度目の牡鹿での検視だったので古藤野寿広先生に仮設診療所設置のお願いした、機材や薬などは大崎支部の先生がたが自分の診療室から持ってきていた、初日だけで患者は20名をこえ対応に困っているようだった、その後東北大からの応援もあり避難所での応急処置は機能しているようだった。

また航空自衛隊松島基地の歯科医官からも連絡をいただいた、避難所での歯科治療ができる体制があるとの話だったので、状況をお伝えした。

3月中は身元不明のご遺体のみチャートをとった、3月20日89体、21日72体、22日142体、23日158体、24日99体、25日65体、と朝8時に石巻警察署に集合し、2階の刑事1課でお茶を出されミーティングに参加し警察車両に乗せてもらい旧青果市場に向かう、鑑識4名と私で乗車し今日も頑張ろうと明るい曲をかけモチベーションを上げる、到着後ひたすらチャートをとる、帰りは20時をすぎている、帰りの車の中は、朝とはうって変ってみな無言である、警察署で下され自宅まで自転車で帰るがふらふらだった。身元不明のご遺体だけでこの数であるが、身元判明のご遺体も合わせると、ピーク時は1日に300体くらいは搬送されていた、陸上自衛隊の大きなトラック

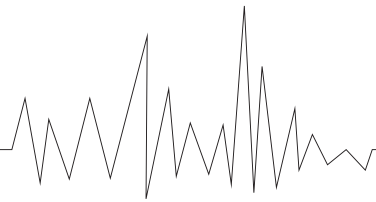


に何体も積まれ、ご遺体を下す入口では順番待ちのトラックがいた、自衛隊の隊員が、ご遺体を重ねて運んで来てもいいだろうか？と聞くので、それは亡くなった方に失礼なのでやめて下さいと話した。

ご遺体の顔写真が旧青果市場前のテントに貼りだされ、ご遺族を見て似てると思うご遺体があれば、警察官と一緒に入って来て確認する、外では安置所に早く入れろとご遺族と警察官で小競り合いが始まっていた、しかし警察官と一緒にいざ入って来て、これはと思うご遺体を何体か確認するが、途中で皆やめてしまう、大きな旧青果市場のフロア一面に並べられた1000体を超す遺体に顔色が変わる、身元不明のご遺体は遺体袋のチャックを開けて顔を出しておくことになっていたが、がれきでつぶされたご遺体や焼死体も多い、家族を探したいと思う気持ちもあるが、この現状を見て耐えられないのであろう。

がれきで頭部がつぶされたご遺体は何体もあり検視は大変だった、喉まで手を入れ脱落した歯牙をさがし、上顎骨、下顎骨の骨折を整復し顔を整えて歯槽溝に歯牙を戻してチャートをとった。また焼死体で自衛隊が車の中の灰を集めてビニール袋にいられて何体か持ってきた、法医の先生と灰の中から歯牙と骨を一生懸命さがした、法医の先生も私も真っ黒になりながら探し、チャートを作った。今思うと自分でもよくできたなと思うが、その時は毎日、身内を発見し大声で泣きじゃくるご遺族、放心状態で立てなくなるご遺族をたくさん見てすべてのご遺体を家族に帰すというモチベーションが強かった。

遺体袋から小さな女の子を取り出し、半日ずっと抱きしめていた母親がいた、案内した警察官もそばに半日ずっと立っていた、その傍らでチャートをひたすらとる、その場から逃げだしたい気持ちで一杯だった。小さい男の子のご遺体に泣きながらすがりつく小学生くらいの女の子がいた、弟だったのだろうか、母親が一生懸命なぐさめる。高齢のご遺体の周りに10人位のご遺族が泣きくずれる、皆に愛されたやさしいお祖父さんだったのだろう。服を着せてもいいかと聞かれたこともあった。家が流ししご遺体を持ち帰れないと言い一生懸命、遺体袋の下に布団をひいていたお婆さんもいた。発見場所が同じ3体のご遺体があった、母親と小学生くらいの子供二人である、父親は無事なのか？この状況から立ち直れるのか？そんな事を考えながらチャートをとった、2、3日後、父親と思われる長身の体格の良い男性が警察と確認しにきた、ご遺体の顔を見たとき大きな叫び声をあげ泣き出した、場内で作業していた、警察官、自衛隊、歯科医すべての手が止まった、近くでチャートを取りながら私も泣けてきた。チャートを記入していると後ろから「ママだけ生き残ってごめんね」とささやく声が聞こえてきた、小さなご遺体に話しかけている女性がいる、胸を締め付けられる思いで耐えられない、検視作業よりもご遺族の悲しみに触れることの方が辛い。ある焼死体で法医の先生からDNAが採取できないので、抜歯して欲しいかと頼まれた、大白歯の歯髄からDNAを採取したいらしい、身元不明のご遺体は、法医がDNA照合のため心臓からの採血と鑑識が足の親指の爪を採取していた、しかし抜歯はいくら身元判別のためとはいえ遺体損壊になる、すぐに江澤先生に電話した、できないだろうが調べてみると言われ折り返し電話がきた、法医学会、県警本部で調べたがやはりだめである、後に江澤先生からその時の電話で私が何度も「本当に抜歯をしなくていいんですか？なにも残りませんよ」と食い下がって怖かったと言われた、江澤先生も苦渋の決断だったらしい、もちろん私の為を思っただけの判断でもあったのだが、身元不明のご遺体を家族に帰すために私がいるのに何もできない悔しさがあった、次の日の朝、自医院に寄り



エレベーターと抜歯鉗子をポケットに入れて石巻警察署にむかった、隙を見て抜歯するつもりだったが直前になってやめた、日本歯科医師会の応援で遠くは沖縄県から自医院を休みにして検視に来てくれる先生方や江澤先生に迷惑がかかってしまうと思った、現在カルテやDNAによる照合がすすめられているが、焼死体は前歯部が炭化して無くなっているうえ口を開くと崩れてしまうため臼歯も見れない、DNAも無く身元不明のままである。

子供の検視はつらかった、死後硬直で開かない小さな口にスパチュラをねじ込み無理やり開ける、家に帰してあげるからお願いだから開けてくれ、心の中をお願いする、乳歯列でカリエスのないご遺体を何体か見た、母親が食生活に気を配り、仕上げ磨きもきちんとしていたのだろう、どれだけかわいがっていたか想像できる、私はチャートをとりながら早く家に帰れるように顔に付いた泥や鼻血のあとをきれいにし、泥だらけの前髪を上げきれいな顔を出してあげる事しかできなかった。

5月に入り遺体の搬入は落ちついてきた、宮城県の検案所は気仙沼、南三陸、石巻の3か所になった、5、6月は日本歯科医師会の応援にまかせ、週に1度行く程度になったが7月で日本歯科医師会の応援が終わり現在石巻は、鈴木裕先生、阿部清一郎先生、佐々木一久先生、五十嵐公英先生と私で昼休みと、私が休診日の木曜日と日曜日に行くようにしている、宮城県歯科医師会の応援もありその他の曜日は古川の先生や仙台の先生が来てくれている、遺体の損傷がひどく口腔内からスプーンでうじをかき出しながらチャートをとっている。7月から検案所は旧青果市場から釜のふれあい広場に移動した。真夏にテントの中での検視はつらい、オペ着の下でTシャツの汗がしぼれる、また暑さが遺体の損傷を加速する、オペ用の帽子、オペ着、ビニール製のエプロンをして髪や衣服に付いた臭いは取れない、マスクの鼻のところにハッカ油を染み込ませている。損傷がひどいご遺体にうちの主人だといってすがりつく女性がいた、一緒にきた親族は損傷がひどいご遺体に近づけない、ご遺体から引き離し歯科のカルテを持ってくるように勧めた、この一件以来ご遺体

の損傷、臭いは、我慢できるようになった、あたりまえだが、私が検視しているご遺体は皆、だれかの夫、妻、父親、母親、息子、娘なのである。

大規模震災や事故の場合、救急治療などで医師の活躍は脚光をあび、広く認識されているが歯科は話題にもならない、歯科治療はあくまでQOLの向上、より良い生活、より良い人生を送るための手助けをする仕事であり震災や災害などの緊急処置を必要とする場面では活躍の場が無いと思っていた、しかしこのような広範囲に及ぶ開放型の大規模災害では硬組織と金属で多様化している治療痕が個人の特定に役立っている、むしろもう歯科の治療痕でしか個人の特定はできないのではないだろうか、日々の診療で美味しく食べれるように、きれいな笑顔で笑えるように治療してきたが、今回の検視で個人の特定をすることも、亡くなった方、ご遺族にとってのQOLだと思う。

残暑が厳しい今もご遺体の搬入は続いている、台風などで海底が荒れると、海底のがれきや、ヘドロのなかのご遺体が浮上してくるようだ、石巻市だけでまだ1000名近い行方不明者がいる、長い仕事になりそうである。